

投句欄 自由律の泉 ⑬

- 1 他人の死にチョメチョメ カエルが涙 檜 幽可
- 2 オンガクを北の爪で剥がしても結局西で鳴るのだ 大迫 秀雪
- 3 時空越え宙に浮き人々が舞う歴史 大岳 次郎
- 4 曇りの空に朝の気まぐれ アカホリ フキ
- 5 生命の躍動あつての自殺かな 行方 はいさつき
- 6 コロナで負けるな鯛焼きのしつぽまであんこ 金澤 ひろあき
- 7 夜のしじまに転がっている文化鍋 野谷 真治
- 8 晩飯のいつ時 止めどなく独りを味わう 植田 博
- 9 日向の電車のゆりかごに眠っている 無 一
- 10 はぐのが無理なら、塗ってみろ ホームセンター造林鎌
- 11 ゆっくりしようただひとりあたたかく 田中 美太
- 12 何もかもはつきりさせてしまった虫眼鏡だ 久光 良一
- 13 道理が泣かされておる夜道歩く 柳 泉洞
- 14 孫が赤子を抱いて佇む冬海の広さ 小山 榮康
- 15 母子草 未読の返事待っている 原 さつき
- 16 不整脈を捕まえる心電図計深夜の出動 白松 いちろう
- 17 泣くことも笑うことも覚えて抱かれている子 富永 鳩山
- 18 雨を風を人の手を渡ってきた手紙の顔 富永 順子
- 19 裸ん坊にされたくねくねと笑う街路樹 平岡 久美子
- 20 わたしの仕舞を考える通夜の席 ちば つゆこ
- 21 ほんとの気持ちは逆さまコウモリ 佐川 智英実
- 22 今生の別れに感謝の抱擁をする 部屋 慈音

- 23 月が昇ってゆく空にある傾斜 黒瀬 文子
- 24 コップの透明な酒に染まってく 荻島 架人
- 25 愛し合い別れた後のずるい春 中島 雲舟
- 26 燕の子あの鳴き顔は今どこに 藤澤 雅幸
- 27 汚れた夜露に泣く阿呆 江藤 霧鳴
- 28 穢れたわたしの手に子がしがみつ く 室伏 満晴
- 29 スパッと秋の空 スプーンで何を計ろうか 井尾 良子
- 30 あめんぼうツイツイふるさとの水の空ゆく 佐瀬 風井梧
- 31 人をゆるす事、今日川の青いこと さいとう こう
- 32 「何もかもだめ」な日の心は紙風船 明日原 夏斗

● 泉⑫より 一句鑑賞

心ないやりとりが聞こえる足の裏

植田 博

▼うる覚えですが、太宰治の逸話を思い出しました。晩年、人気絶頂でも私生活は荒んだ状態に苦しんでいた太宰を囲んでの宴会で、酔い潰れて先に寝た太宰をけなし合う仲間に絶望したことが「井伏さんは悪人です」の遺書につながったとか。 (行方はいさっさ)

▼心の奥底をとらえた秀句。闇を気にしているのだが、光を求めたい祈りを感じる。決してそこはごまかさず、追求するのが良い。

(ホームセンター造林鎌)

▼何が原因だろう。隣家だろうか、隣部屋だろうか。見知らぬ方のやり取りか、知人同士のやりとりか。荒れる響き、空気。しかし、私の足の裏は静かに且つ確かだ。手で触ってみている。人は足の裏を見せ合える仲なれば、そこに和があるに。

(藤澤 雅幸)

そのままがいいよと風の温情

黒瀬 文子

▼人に葛藤がある時、ふとした自然の動きが自分の心の味方になってくれることがあります、勇気と確信を与えてくれ、許しを知ることができます。解き放たれた心の平和が伝わってくる。女性らしいトーンがいいですね。

(部屋 慈音)

▼ありのままの自分を受け入れてくれる存在を人は常に欲している。どれだけ辛く寂しい状況でも、風はいつもと変わらない。変わらないうからこそ、普段は気づかないその温もりが愛しく寄り添ってくれる。作者の豊かな感性が生んだやさしい句だと思いました。

(室伏 満晴)

コーヒーの香の朝に居る

田中美太

▼わかります。私も、朝はコーヒーです。ブラックの。(無 一)
▼一日の計は朝の珈琲一杯にあり。毎朝このコーヒーの香りに包まれる幸せを感じます。
(白松 いちろう)

忘れ物忘れて笑うしかない

白松 いちろう

▼あれとあれをしようと思つて二階にあがつたものの、あれはしたけど、もう一つのあれが思い出せない。さんざ考えた末、あきらめて下に降りたとたんに思い出す。そんな笑うしかない私にはとてもよくわかる句です。
(久光 良一)

▼この私、自称万年中年女と嘘ついてはいるが、まさにこの作者と似たり寄つたりの日常茶飯事、「笑うしかない」作者の明るさを見習います。
(ちば つゆこ)

この路を曲がらずに行く秋の月

藤澤 雅幸

▼人はいくつもの路を曲がらずにぶつからずに進むのは大変なこと、それでも自分を信じてまっすぐに生きてきた。その先に大きな秋の月が頑張ったネと笑いかけてくれるような気がする。(井尾 良子)
▼凜としたものを、秋の月に感じました。曲がった路でも、月は、常に決められた正しさを、行きます。長い年月を、これからを、教えられます。
(田中美太)

潔くありたいですねでも燃え尽きなさるな

田辺 まさゆき

▼「尊敬している人は？」と問われ、いざ想像すると性質的に「シンプル・イズ・ベスト、潔い」という言葉が当て嵌まる人物が多い

ように思う。個人的にだが。会話文の形であるのは詩を通したメッセージだろうか。何れにしても『潔くありたい』、その心には共感しかない。そして締め言葉に何気ない優しさが伝わってくるようだった。
(江藤 霧鳴)

悲しみの水分過多で低く漂う

富永 順子

▼日本のわび・さびには、悲しみの要素も含まれています。湿度の高い日本では、悲しみも水分過多になりがちです。グローバル化した世界では、志低く見られがちですが、我々には、そこから立ち上がる力があるのです。
(大迫 秀雪)

ひらり落葉が風に身をまかす夕焼け

富永 鳩山

▼夕暮れ、と読みそうになった。これだと直感的で、耳の文だなと思う。夕焼けにすると、色が全然違ってくる。目の文だ。断然に夕焼けの方がいい。落葉の輝き方が違う。ひらり、と風の二つについては悩んだ。
(柳泉 洞)

▼木から離れた落葉は哀しい。西方浄土へ向かってしまったのだ。もう、風に身をまかす以外、なすすべがない。だが、西の空は、明るく美しい夕焼け。この夕焼けこそが、わたしたち人間の救いなのだ。終末の覚悟である。
(大岳 次郎)

妻の遺服を畳む闇迫る軒下葎草の花揺れる

小山 栄康

▼思いを全て述べたい時があります。住宅頭信にも思いを全て述べる書き方の句があり、心を打つのです。伝えたい、そして残したい思いを、心のしらべに乗せて歌う。それも自由律の魅力です。この句の悲しみに震えます。
(金澤 ひろあき)

ブロック塀のすみっこからコスモスが咲く 平岡 久美子
▼平凡な暮らしの中でこのコスモスの様に私は生きたいと思う。

(小山 榮康)

挨拶をする相手もなし

大出 匡

▼どれほどの孤独なのだろうと察するが、案外、本人はそれを享受して楽しんでいるのでは。自由気まま、好きなことをし好きな時に寝る。究極の「ひとり」。それは自分と向き合うことなのかもしれない。
(原 さつき)

空見上げもみじ葉のかるたとり

柳 泉 洞

▼「もみじ葉のかるたとり」が、なんとも、魅力的です。空は、どこまでも広がっているのでしょうか。
(野谷 真治)

水音すずかぜ両手を空に広げる

大 岳 次 郎

▼音や、風を感じることができ、心が解放され、気持ちが大きくなりました。
(アカホリ フキ)

ダイジョウブツキガミテイテクレル

大 迫 秀 雪

▼カタカナの表現がまるで月に照らされているかのようです。青春時代を思い出しました。
(佐川 智英美)

水拭きした空に今日も誰かが虹を描いた

明日原 夏斗

▼雨上がりの空を「水拭きした空」と非凡に詠んで、「今日も誰かが虹を描いた」と纏めています。表現は散文的ではありませんが、内容の非凡さが光っていてとても巧いと思います。もし詠み人が、お歳を召された方であれば、チャレンジ精神と感性の若さに感心致します。

す。

(檜 幽可)

仲見世は疎ら秋空ひろすぎる

さいとう こう

▼日頃は観光客で賑わう浅草・仲見世の人の少なさが、秋の空の広がりとともに、なおさら寂しい風景となって胸に迫ります。余韻の残る句だと思います。
(明日原 夏斗)

約束は百年後ですキリコの街のかたつむり

井 尾 良 子

▼不確かな世界を描いたキリコの世界の俳句バージョン。その発句となる出だしがお見事で、かたつむりはご自身でしょうか、ダイナミック仕上げになっていて素晴らしい作品です。
(中島 雲舟)

▼井尾さんの独壇場ですね。私に理解はちよつと無理ですが、キリコの街に大きくなったかたつむりが映りこむような妄想を抱きました。
(平岡 久美子)

● 係より

先日総会についての返信ハガキに「泉」に関するご意見がありました。「鑑賞を一句ではなく」とありましたが、今のところ係の力不足、また紙面を増やすことで郵送料等がかかるなどをふくめ、しばらくは現行のまま行きたいと思えます。どうかご容赦ください。

★次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

〈送り先〉〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子 メール kumiko801@h-wing.net

〈締め切り〉 2022年2月20日

